

父なる神の愛と失われた二人の息子（ルカによる福音書一五章一二～二三節）

——宮田光雄『〈放蕩息子〉の精神史』を手がかりに——^①

山崎 和明

目次

一 論争の中のたとえ話

二 「たとえ」という手法

三 聖書解釈

（一）弟息子の自己実現と旅立ち（一五・一一～一六）

（二）弟息子の罪の自覚と悔い改め（一五・一七～二〇a）

（三）聖書に記されていないこと

（四）父なる神の愛（一五・二〇b—二四）

（五）怒る兄息子となだめる父（一五・二五—三二）

四 イエス・キリストの恵

一 論争の中のたとえ話

ルカによる福音書（ルカ伝）一五章一一～三二節の聖書箇所は、「放蕩息子」の物語としてよく知られています。「二人の放蕩息子」の物語（R・ブルトマン）とか、「父の愛の物語」（J・エレーミアス）とかとも呼ばれたりします。宮田氏は、二つを合わせ、さらに的確に「父なる神の愛と二人の失われた息子兄弟」と表現しています。

この「放蕩息子」の物語は、H・ヴェルダーによると、最近の〈歴史的・批判的〉な聖書釈義では、「歴史的イエスに由来」し、「イエス語録としての〈真正性〉を認めて」いると言われています。これに従えば、「いわばイエスその人の〈肉声〉」を聞き取ることができる」物語であると言えます。

この「放蕩息子」のたとえ話は、以下のような文脈で語られています。ルカ伝の一五章のはじめを見ると、「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄ってきた」時のことです。「すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、〈この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている〉と不平を言い出した」（ルカ一五・一）でした。「そこで、イエスは次のたとえを話された」とあります。つまり、このテキストは「論争の中のたとえ話」であることが分かります。

そしてイエスは、三つのたとえを、つまり「見失った羊」、「無くした銀貨」、そして「放蕩息子」のたとえを語っています。「見失った羊」のたとえでは、「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」（ルカ一五・七）と語られ、無くした銀貨」のたとえでは、「言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と結ばれています（ルカ一五・一〇）。そして「放蕩息子」のたとえでは、一人の罪人が悔い改めた時の喜びの大きさから、さらに論点が広がり、「悔い改める必要の無い」正しい人の悔い改めの必要性へと展開しています。²⁾

無くしたコインや見失った羊には、責任を問えません。むしろ管理者の責任が問われます。しかし放蕩息子の場合は、当然、さまよえる本人の責任があります（自己責任）。ここが自由意志と責任能力のある人間の難しさです。自由意志

をもつ人間の場合、羊やコインとは違い、人間の自由と意志を尊重せねばなりません。首に縄を付けて人を動かすことはできません。そこに自由意志をもつ人間の苦しみと悲しみがあると同時に、また「人間の尊厳」も存在するのです。また「悔い改める必要の無い」と言われる（正しい）人間には、ふつふつとわき出てくる、抑えがたいコンプレックスやプライドがあります。それゆえ人間の場合は、いっそう厄介です。

それでも、失われた者が生きて帰ってきた場合の喜びは、コインや羊の比ではないでしょう。放蕩息子のたとえでは、「罪人や徴税人」や放蕩の限りを尽くした弟息子だけではなく、彼らを見下すような立場に身を置く「ファリサイ派の人々や律法学者」そして兄息子の悔い改めの必要性が明瞭に打ち出されています。

こうしたコンテキストの中で聖書箇所を読めば、これら一連のたとえ話は、単純に、罪人や「貧しい人々への福音の宣教ではなく、「ファリサイ派の人々や律法学者のような知的な」批判者たちに対する福音の弁明」という性質を持っています。ファリサイ、律法学者たちとの論争の経緯を示した「見事な論争」、しかも「愛の優しさで武装した論争」（ハンター）と言えます。なぜなら、弟や「罪人や徴税人」に対してと同じように、兄や「ファリサイ派の人々や律法学者」にも「悔い改め」への警告と同時に、「赦し」の約束が語られているのですから。

二 「たとえ」という手法

次に、「たとえ」を用いて語るといふ手法について考えます。新約聖書には四〇ばかりのイエスのたとえ話が伝えられています。イエスのたとえは、「文芸作品」でもなく、「普遍的命題を押しつけるもの」でもありません。イエスのたとえ話は、歴史的に一度限りの状況への応答ではありません。従って、一回限りの出来事としてではなく、むしろ、繰り返し返し新しく神の言葉として語られ、また聞かれなければならない事柄です。人間性に共通する問いと、繰り返し現れる課題への応答であるべきなのです。

神の国のたとえについてH・ヴェーダーの素晴らしい教えが記されています。「たとえは二つのことを教える。・・・

一方では、この世の眼をもつて〈神の国〉を観ること、・・・他方では、神の眼をもつて、この世を観ることを教える」(『隠喩としてのイエスのたとえ』第三版、一九八四)。そこには、父なる神の愛が、透かし絵のごとく見えてくると同時に、イエスのたとえは、自分自身を発見する鏡としての働きもしています。しかも、人生の歩みのそれぞれの段階において、兄や弟と同一化できる類似点がいくつもある訳です(シユヴァイツァー)。

放蕩息子のとえ話は、そこにイエスの肉声を聞けるだけでなく、イエスご自身からしか聞けない、イエスの自己証言と言つてよいでしょう。宮田氏は、イエス自身は、この物語のどこにいるのか、と問います。実際、物語の中には、イエス(ないしイエスを象徴するような人物)は登場しません。しかしイエスはたとえをもつて、父と二人の息子の仲保者として、そして神と人間との仲保者として私たちに語りかけているのです。イエスの語りの中で、イエスと出会い、イエスとの出会いによつて神の愛が出来事として生起しているのです。この驚くべき神の恵みに直面して、人はそれに対して人格的に応答するよう呼びかけられているのです。

イエス・キリストがこのたとえを語られたゆえに、そのたとえは真実であると信じることができます。もし、イエスが語られるのであれば、おそらくそれは人間の戯言に過ぎないかも知れません。イエス・キリストが語られたがゆえに、たとえで語られている神の現実、神の愛は、私たちが信じて良い、信じるに値する神の現実なのです。

三 聖書解釈

それでは、以下において聖書を読みながら確認していきましょう。

(一) 弟息子の自己実現と旅立ち(一五・一一―一六、新共同訳)

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14何かも

使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話させた。16彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。

弟息子は、自由と独立を求め、父親のまだ生きている間に、相続「財産」を父に求めます（父親殺し！）。申命記二一・一七によると、相続割合は長子が全財産の三分の二で、弟は三分の一のようです。それで「父は〔財産〕を二人に分けてやった」（ルカ一五・一二）。しかし、生前贈与の場合、たとえ贈与しても、父親に用益権は残り、息子に処分する権利はなかったようです。³父の生前に贈与された財産を売却する事は、父をおろそかにして、あたかも父が本当に亡くなったかのように振る舞うことを意味していました。それによって、家族との縁を切り、子としての身分を失ったと解釈されます。

ここで同じ「財産」と訳されている言葉ですが、弟息子が要求した財産（ウーシア）と、父が与えた財産（ビ奥斯）は異なったギリシャ語で表現されています。ウーシアは、「存在」、「実存」を意味しています。そこから、財産・所有物を意味するようになります。弟息子は「財産を無駄遣いしてしまつた」。その「使い果たした」財産も、ウーシア（実存的存在）でした（ルカ一五・一三）。他方、父が分け与えたビ奥斯は、「生命」、「生活」を意味しています。そこから、「生活方法」や「生活費」そして「財産」を意味します。父は、生きることを得させる生活手段を二人の兄弟に与えたのでした。しかし、弟息子が得ようとしたウーシアは、外見的には、財貨や財産であっても、単に生活手段に留まらず、心理学的には、その人の内にある能力や資質などを含む「実存的存在」そのものでした。それは、親権を退け、後見人を忌避し、自分自身に対する主権的要求、自分の能力と可能性とを自立的に発展させたいという要求です。「現にいる父のような存在になりたくない、父の単なる複製品になることは御免だ、自分は自分だ、自分自身になるのだ」という自己実現への渴望にあふれています。すると、精神的・肉体的な従属的立場、所与の秩序、権威や命令、義務を負う伝統にたいする反抗と抵抗へと繋がるのが相場です。⁴

押さえきれない自立への願い、父からの自由と独立を獲得すべく、弟息子には、遠い国に旅立ちます。〈遠くへ行きたい〉。これまでよく知っている親しい近い世界を離れ、未知の遠い世界の魅力に引きつけられるものです。遠く離れた異なる世界でこそ、従来の伝統や秩序から自由になると錯覚しがちです。外面的な違いが、あたかも本質的な違いであるかのように思ひなすのです。しかしそこには、若者につきものの、未熟さと反逆性がつきまとってきます。経験不足と自己規律のなさです。そして「放蕩の限りを尽くします」。つまり、能力や資質、自己のすべてを、虚飾と幻想の世界で燃焼し尽くしてしまうのです。

そして、これまで限りなく開かれて見えた世界が、やがて何一つ逃げ場のない閉じられた状況に一変します。落ちるところまで落ちて、初めて自己吟味がなされ、今の苦境は自分の責任にもとづくものと認識するにいたる訳です。あらゆる自己正当化は放棄せざるをえません。未熟なまま野望に駆られ、軽率にそして無責任に突っ走った結果です。そして〈罪責告白〉をせざるを得なくなる訳です。イエスの時代のユダヤのことわざに「イスラエル人がイナゴ豆を必要とするときには、彼らは悔い改める」とあります。

(二) 弟息子の罪の自覚と悔い改め (一五・一七～二〇a、新共同訳)

17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18こをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』
20aそして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。

「我に返る」とは、幻想上の世界で、空想上の可能性をもてあそぶ代わりに、現実の世界にもどり、人生の限界を認めることです。そして自分の行動から生まれた結果に対して責任を引き受けることでもあります。それは、〈悔い改め＝回心〉(メタノイア)を意味しています。もはや外的な条件や事情に、すなわち、災難や運命、社会や体制などに、責

任を転嫁するのではなく、それをはっきり自分自身に引き受けるのです。

そこを「たつ」（アナスタース＝アニステミのアオリスト分詞）は、復活、甦りと同じ語源をもちます。父からの離脱は、未熟さゆえの無分別な行動でした。父の許への帰還は、正しく責任を引き受けることを知った成熟した決断と言えるでしょう。

（三）聖書に記されていないこと

聖書には描かれていないことですが、宮田氏は、父は放蕩息子を探さなかったのかと問います。しかし豚を飼うような〈遠国〉に行ったことや、「娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶした」などの情報が入っていることから、弟息子についてのアンテナを張り巡らせていたに違いありません。

では、兄はどうして弟の遊蕩生活を知っていたのか。どの聖書註解者も沈黙している！と宮田氏は言います。そして宮田氏は、兄息子の深層心理を読み解いています。兄の反応は、弟についての知識や情報から来ているのではなく、無意識的な（自己）〈投影〉の結果だと。兄の意識が弟に向ける軽蔑と非難は、実は、意識されないままに、兄が自分自身の中にもっている自分の人格の暗い部分にたいしても妥当するものであったと。それは、兄が自分自身について認めることを拒否し、それゆえ意識の中から抑圧し排除していたものの、すなわち、彼自身の人格の〈影〉の側面であったと。実は兄の内にも、弟と同じ願望が密かにうずいていたのです。兄は、内にある攻撃衝動を自分自身に向けるのではなく、外の誰か、外部の者に向けて意図的に投射せざるを得なかった訳です。偽善者は、いつも悪は自分以外の他者の中にこそあると見るのです。その意味でも、良く出来た兄も、煎じ詰めれば、出来の悪い弟と変わりません。自分の内にある闇の部分の自由を表に出すか、それとも押し殺して内に秘匿するかの違いを除けば、兄弟はいずれも変わらないのです。

（四）父なる神の愛（一五・二〇b—二四、新共同訳）

20 bところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。 21

息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』²²しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。』²³それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。²⁴この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

父なる神は、忍耐強く待つておられたのです。それは放蕩息子であつた弟に対するのと同様に、兄息子に対しても同じです。「首を抱き、接吻した」とは、直訳すると「押しかけるように、襲いかかるように首を抱き、何度も繰り返し口づけをした」となります。抱擁し接吻することは、赦しの徴であり、自分の息子として再び受け容れた事を意味しています。そして「一番良い服」を着せます。「一番良い服」とは（第一の＝最初の服）と解釈することもできます。すなわち、おそらく父が大切に保管し家に残しておいた息子の着ていた服かもしれません。「履き物」も、奴隷と区別し、自由人の徴であり、父は、弟息子を（使用人や奴隷ではなく）実子、息子として復権させたのです。²⁵

ここで大切なことは、父の接吻が、息子の罪責告白に先行していることです（「ゴルヴィッツァー」）。しかも、父は息子の告白を途中で遮って、最後まで（「雇い人の一人にしてください」とまで）言わせていません。もちろん弟息子は涙ながらに最後まで言えなかったのかもしれませんが。また父も直接、赦しの言葉を発していません。父の赦しは、僕たちに対する父の指示によって間接的に示されています。父の喜びはひときわで、放蕩息子の死から再生、失われていたことから再会という二重の喜びとなつて表れています。

これまで自分の自由を制限し拘束するものと映っていた者（父）が、実は、自分を支え守ってくれる存在でした。放蕩息子が虚しく求めていた、自分自身の価値を確認したい・されたいという欲求は、逆説的ですが、自分が無価値な者であると自己認識したときに、父は無償で、しかも価値ある息子としてとして受け容れることによってその渴望をかなえてくれたのです。自分を制約する父から逃れ、父への依存と服従せざるを得ない状態から離脱したはずにもかかわらず、その父が、あるがままの息子である自分を受け容れてくれるパートナーだったと認識するに至るのです。

(五) 怒る兄息子となだめる父 (一五・二五—三二、新共同訳)

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

畑で仕事を終えて帰ってきた兄は、家から聞こえる歌舞音曲に驚き、出来事を知らされると、怒り心頭に発します。

兄は、神の現実を受け容れられませんが、勝手気ままに生きて、したい放題にしてきた弟を救い、赦すという事態に、兄はついて行けず、あらゆることから自分を閉ざしてしまいます。神の現実には、兄にとって、二重の意味において、許しがたく受け容れる余地のない不条理で不合理なことでした。第一に、〈それではやり得ではないか!〉〈自業自得ではないのか!〉という許せない思いがありました。「赦」とは、一度起こったことを、あたかも無かつたかのように、元に戻す、今様に表現すれば、「リセット」をかけることを意味します。人間の世界において、それが許されるなら、どんなに素晴らしことでしょうか。第二に、自分のこれまで積みあげてきた努力や徳が、何ら評価されていないことに我慢ならないのです。〈正直者が割を食い、馬鹿を見る!〉人間的に見れば、道徳的に非難の余地のない、献身的な無私の生活が何もたらさないとは、何たる不公平、何たる悲劇でしょうか。

兄は、喜びの祝宴から距離を置き、そこから身を退こうとし、父に悪態までつきます。兄の納得しない姿が目の前

に浮かぶようなりアルなタッチで描かれています。^⑥「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか」。兄の怒りを露わにした言い方や、父にたいして「あなた」と呼び、「あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして」といった嘲笑的な言い草では、理不尽さに対する兄の怒りが、出来損ないの弟に對して以上に、弟息子を赦す父に向けられています。

今や、いつも父のすぐ傍にいたはずの兄の方が、遠国に出かけていった弟よりも、遙かに父から遠くかけ離れていたことが暴露されます。実は兄にとつても、丁度、家を出て行った弟が感じていたと同じように、父の家は、僅かの喜びもない、いわば牢獄のような禁止と命令の垣根で取り囲まれた家であり、我慢をしながら服従し労働するような日々であつたのです。兄の父への奉仕は、何の喜びもない奴隷労働であり、兄は父を、一切の願いや生の喜びを奪い取るだけの専制的支配者だと主観的に見ていたのでしょう。^⑦

しかし父は、それに対しても優しく応えています。あくまで身を退こうとする兄をも、父はその愛のゆえに、去らせたままにしておこうとはしません。兄をなだめるために外に出ていく父の行動は、弟に走り寄る父の姿と平行しています。そして父は、反抗する兄をも赦して、同じくこの祝宴に招いています。

ここで宮田氏は、「神から遠ざかろうとする人間の歩みがいかに大きいものであつても、人間のもとに赴こうとする神の歩みはさらに大きいのではないか」と教えてくれます。イエスの父なる神は、人間のほんとうの自由や自己実現を抑圧したり制限したりするような専制君主でもなければ、張り合うような競合相手でもありません。神の恵みと憐れみとは、人間を奴隷のように卑しめるのではなく、かえって人間の固有の価値と尊厳とを回復してくださるのです。

では、一体どうして放蕩息子とは、父のもとに返ることができたのでしょうか。それは、たとえの物語から推測するほかりません。宮田氏は、その答えとして、根源的信頼があつたから父のもとに返り得たと記しています。この信頼、信仰を、宮田氏は、H・ボルンカムの〈父の思い出〉、E・H・エリクソンの言葉を用いて「根源的信頼」^⑧と呼んでいます。この根源的信頼と呼ばれるものがあつたからこそ、放蕩息子は、悪党の集団の中に自分の居場所を求めたり、進

むことも戻ることもできず自殺やのたれ死に追い込まれたりすることもなく、家に帰る決断ができたのです。豚から父の家へは一直線であるとは限らない。豚からの道は、牢獄であったり、あるいは自殺へと通じることとも少なくない（！）のですが。

四 イエス・キリストの恵

イエスが放蕩息子^{たとえ}のたとえを語り、私たちは弟^{あな}の立場を通して、父なる神の私たちに対する愛がいかほどであるかを聞けました。それは人間的には立派で正しい兄が怒り不平不満を抱くほど、恵みと憐れみに満ちた「不合理な」愛（溺愛ではない）であることを知りました。私たちが罪を告白する以前に既に、罪にまみれた私たちを受け容れてくださっていることを知りました。

これは、単に「たとえ話」だけではなく、「神の現実」です。実際、父なる神は私たち罪人を愛し、私たちのために独り子をイエスとしてこの世に送り、御子の命も惜しまず、十字架にかけられました。そしてイエス自身も、父なる神の御旨を受け容れ、それに従い、罪にまみれた私たちのために命を捧げてくださいました。しかし父なる神は、御子イエスを捨て置かず、死からよみがえらされました。そうして主イエス・キリストの恵みをも、私たちは知りました。

私たちは、イエス・キリストの恵みを通してはじめて、実にイエス・キリストの恵みを通してのみ、父なる神の愛と神の現実を知ることができるのです。私たちは、近くにいるつもりでも父なる神から遠く離れていることもあれば、遠くにおいても父なる神の近くにいることもできます。ただ、イエス・キリストに立ち帰ることなしに、私たちは、真に父なる神の御許に戻ることはできないのです。

次に、兄^{あな}の立場から見てもみましょう。このイエス・キリストのたとえを聞いて、父なる神の愛を知った私たちは、人間的には正しい行い（業）をいくら積み上げて、それが、父なる神の愛を受けるにふさわしい保証になるわけではないことを悟りました。ルターの「信仰義認」論と同じです。究極の事柄を前にしては、人間の行為は「あたかも」無価

値のように見えるくらいです。実際、兄こそ、父なる神の最も近くにいるようでありながら、遠く離れて、疎外されていました。「何年もお父さんに仕えて」、「言いつけに背いたことは一度も」なかった人間的従順さ、人間的正しささえも、父の心に適っている保証にはなりません。父の心とまったく合致していいどころか、真つ向から対立していたのです。人間的従順さや敬虔さは、一見、御心に適っているように見えるだけに厄介です。似て非なるものほど見極めが付かず、惑わされます。不安な人間は、目に見える分かり易い指標を選んで、そこに安住します。

「何年もお父さんに仕えて」「言いつけに背いたことは一度も」なかった人間的従順さと人間的正しさを持ち合わせた兄さえも、父なる神の愛と喜びを共にできないでいます。父は、一人旅立つた弟息子子の事を心に掛け、その身を案じ、時に悔い、時に悲しみ、そして痛み苦しんでいたことでしょう。しかし兄は、そんな父の愛を知りませんでした。兄は、弟息子子の帰還を待つ間の父の苦しみや悲しみを共にして来ませんでした。それゆえ当然、悔い改めて生きて帰ってきた弟息子を祝う喜びを共に出来ないのです。父なる神の苦しみ、悲しみ、痛みを共にすることこそ、神と共にあるメタノイアなのです（ボン・ヘツファー）。

実際、兄は、長らく父の傍にいながら「心ここにあらず」で、結局、自分のために、自分を愛するゆえに、「何年もお父さんに仕えて」「言いつけに背いたことは一度も」なかったに過ぎないのです。つまり兄は、自分のために父に仕えていただけなのです。そして自分のために仕えてきたように見えながら、本当は自分のためにもなっていないかったと言わねばなりません。

兄は、友達と宴会を開くために山羊一匹くれなかったと、父に不平を漏らしています⁹。すでに（本注7）で見たように、父なる神は、ケチで吝嗇な方ではありません。一切の遊興を退け、宴会さえ開けない方ではなかったことは、弟息子子の生還を喜ぶ宴を催したことから明らかです。実は、楽しみや喜びも、イエス・キリストを通さない限り、単なる享樂とつかの間の喜びに過ぎません。友達と宴会で一緒であっても、神（父）が共にいなければ、神（父）と共に一緒に喜べません。父なる神が共にいることができるのは、イエス・キリストを通してのみ可能なのです。

たとえすべての掟を守り、言いつけや命令に一切背かず、生涯、奴隷のように父に仕えているように見えても、イエ

ス・キリストのためでない限り、父なる神のためになっていません。そこには、父なる神は共におられません。「子よ、いつも、あなたは私と共にいる。私のものすべては、あなたのものである」と言われているにもかかわらず、兄はこの「神の現実」から乖離していたのです。

私たちは、イエス・キリストを知らずには、何が父の御心なのか、父の愛は何なのか、何が父なる神のためになるのかを知らないままです。イエス・キリストを知った私たちは、人間的に立派で正しい兄とは異なり、イエス・キリストに立ち返ることによって、父なる神に仕えることが何か、父なる神の御心がどこにあるか、父なる神の愛がいかにばかりかを知ることができます。そしてイエス・キリストに立ち返ることによって、イエス・キリストを愛し、イエス・キリストのために、イエス・キリストのゆえに、「言いつけに背くことなく」働き、そして「命令、律法や戒めに従うとき」、私たちは、はじめて、真に神のために神の御心に従って、神のそばにいて神の愛と喜びを共にするのです。

しかも、イエス・キリストのために生きるとき、私たちは神に仕えると同時に、人間にも仕えているのです。イエス・キリストを通して、神に仕えなければ、本当に神に仕えたことになりません。イエス・キリストを通して、人に仕えなければ、本当に人に仕えたことになりません。イエス・キリストを通して神の国のために仕えれば仕えるほど、私たちはいつそうこの世のためにも仕えるようになるのです。そして同時に、イエス・キリストを通してこの世のために仕えれば仕えるほど、実は神の国のために仕えているのです。

こうした回心（メタノイア）を経験して初めて、これまで無価値に見えたこの世における人間の業は、なるほど、決して決定的な究極の事柄ではないとしても、どうでも良い事柄ではなく、実に大切な事柄であることが分かります。なぜなら、神は御子をこの地上に送られたほど、この世を愛されているからです。神は御子を十字架に架けるほど罪深い人間をも愛されているからです。

このたとえ話には、父の許に立ち返ってからの弟のこと（その後の放蕩息子）は語られていません。同様に、兄が父の招きに対してどう応えたのかも記されていません。しかし私たちは、イエス・キリストの許に立ち返るとき、喜びと感謝とともに父なる神の命令や戒めに従い、奉仕の労働に従事できることでしょう。そして父なる神の（祝宴への）招

きに、共に喜び感謝をもって参加できるでしょう。私たちも、イエス・キリストに立ち回りイエス・キリスト留まることによって、イエス・キリストが父なる神と人間を愛されたように、私たちは、罪深い兄弟をも愛し（つまり自分をも愛す）、この祝宴に連なる一人になれるでしょう。

祈祷

主よ、私たちを我に返らせ、自分の罪を自覚させてください。そして、近くにいても遠くにいても、あなたから離れているのではなく、あなたのみ許に立ち回り、そこに留まらせてください。私たちが悔い改めを告白する前から、あなたの愛は罪にまみれた私たちを受け容れてくださっていることを信じます。そのことをたとえによって教え、そして御子自身の命をもって、十字架の贖いによって知らせてくださった御子イエス・キリストの恵みにより、父なる神の愛を知りました。あなたによって愛されている私たちがこの世に留まる限り、イエス・キリストを通して、あなたの愛にゆえ、神と人を愛し、神と人とに仕える者とさせてください。イエス・キリストの恵み、神の愛、そして聖霊の交わりに感謝し、主イエス・キリストの御名を通して祈りいたします。アーメン

注

(1) 本稿は、宮田光雄著『〈放蕩息子〉の精神史 イエスのたとえを読む』（新教新書二七一、二〇一二年七月）に触発され、同書の紹介を兼ねた説教講話である。本稿では、同書二部構成の内、後半第Ⅱ部「放蕩息子の精神史」を中心に扱っている。

本稿では扱えなかった前半の第Ⅰ部「キリスト教美術の中の放蕩息子」では、中世教会美術からデューラー、レンブラント、そしてロダンやバルラッハ、さらにはシャガール、そして現代の中国の剪纸、日本の渡辺総一まで、キリスト教美術史において描かれてきた放蕩息子の絵画の数々が掲載され、絵画に込められた放蕩息子の意味が解釈されている。第Ⅰ部を読めば、読者はあたかも美術評論家

になった気分ですらなる。

本稿は、はじめ、発行年の二〇一二年一月に開催された岡山愛農聖研津山会場の二日目一八日（日）早天礼拝で、続いて二〇一四年五月一七無教会四国集会高知会場の初日二七日（土）に「神の愛と失われた二人の息子たち」と題して話した（讃美歌は、二三九番「さまようひとび」と五一七番「われに来よ」と）。そして今回、これらの原稿に手を加え、新たに稿を起した。

- (2) マタイによる福音書に、「二人の息子」のたとえがある。父の言いつけを聞くと言っておきながら、ブドウ園の仕事に行かなかった息子（兄とは限らない）と、いやだと言ったものの後で考えなおして、最終的にブドウ園に行った息子（弟とは限らない）のたとえ話である。いずれが父の御心を行ったか（マタイ二一・二八以下）。行くと行って行かなかった息子は、自分自身の言葉に偽りがあると同時に、父をも裏切った（自分自身と父を偽ったことになる）。行かないと言って考え直した息子は、自分の誤りに気が付き（自覚し）行いを改めている。

反抗的で罪深い息子が「後で考え直す」悔い改めの必要性が説かれているが、一見律儀で誠実そうな息子の悔い改めにまで論旨は展開していない。その意味では、無くなったコインや失われた羊の延長上にあるたえと言えよう。

- (3) 弟が財産の分け前を受け取ったときに、律法の規定では、その時点で同様に兄もまた分け前をもつわけではなかった。兄が父家に留まる場合は、兄は、父の死後に初めて遺産を取得できるのであった。父は、肥えた子牛を屠ったが、もはや弟には属さないはずの兄の相続財貨の一部にたいして用益権行使したのであった。

- (4) もちろん、弟息子は、（自立心と冒険心）（ボルンホイザー）、企業家精神に富んでいたのかもしれない。実際、父が息子の出発を押しとどめようとはしていないところから、弟息子の志を喜んでいたかもしれないという積極的肯定的な解釈も出てくる。

- (5) 興味深いことに、この点に関して、冷静に息子を旅立たせた父は、最後の場面で全く別の側面を示していると言われる。そこで取られている父の行動には、ほとんど（女性的・母性的特徴）（H・ヴォルフ）があらわれていると女性の精神分析学者が指摘し、「一面的に家父長主義的な男性の父とは反対に、イエスは、ここではじめて、しかも詳細に、かつ特徴的なタッチで、彼自身の——男性的な反応の仕方と女性的な反応の仕方とを等しく合わせもつ——全体的に統合された神のイメージを示している」（同上）と宮田氏は説明している。

(6) 宮田氏は、「私たちは自分自身を自分でも心から受け容れうるときに、はじめて他者を受け容れ、その喜びに連帯するものとなるのです。もはや弟の帰還を、これまで憎しみ軽蔑し抑圧してきた〈影〉の再現として拒否するには及ばなくなるのです。むしろ、〈死んでいたのに生き返った〉弟の中に、兄自身がこれまでであえて生きようとしなかった自分自身の新しい生の未来を見ることができないのか」と解説している。

(7) 実際の父は、使用人（奴隸）を使っていたが、その奴隸の使い方も決して非人道的ではなく、使用人のように公平公正に扱っていたと推測できる。であればこそ、使用人や奴隸からの不平や反乱もなかったのであろう。「大勢の雇い人には、有り余るほどのパンがあった」（ルカ一五・一七）と記されていることから想像できます。さらに家父長的な家をイメージするが、父は、この放蕩息子が求める旅立ちを権威主義的に押しとどめていない。自由放任主義と言うより、むしろ自立精神を尊重する人だったのであろう。父は、生前の財産分与ですら、息子の求めに応じていることから想像できる。

(8) 乳児期（一歳から一歳半くらいまで）に、母親の愛・受容によって、自己自身の価値と存在を認められることで得る信頼のこと。自分には愛されるに値している、自分はいつでも受け容れられているといった、根源的信頼を意味する（同様に根源的不信もある）。

(9) 宮田氏は、〈子〉が常に父の慈愛のもとにあつて、日々の業に仕えつつ、それを通して豊かな生の意味と固有の尊厳性を与えられているのであれば、特別の祝宴を必要とは思わないと考える。

付表：「放蕩息子」の精神史における「兄」と「弟」の代表的解釈

神学者	時代	「兄息子」	「弟息子」	その他、備考
エイレナーナイオス	2世紀	天使	人類（ユダヤ人も異邦人も）	
ヒエロニムス	4世紀			
テルトゥリアヌス	3世紀	ユダヤ人	キリスト者	「財産」＝神認識。 「遠国」＝悪魔の世界。 「服」＝アダムの墮落の際、失った身分の象徴。 「指輪」＝洗礼。 「祝宴」＝主の晩餐。 「肥えた子牛」＝救い主イエス・キリスト。
アンブロシウス	4世紀			神の言葉から離れた者は飢えざるを得ない。なぜなら人はパンだけで生きるのではないから。
アウグスティヌス	4－5世紀			
ルター	16世紀	業 カトリック	信仰 プロテスタント	
ヴォルテール	18世紀			十分な悔悟を保証してはじめて父の赦し。→重苦しいモラリズムに。社会的成功のための市民的教育ロマン主義へ。

（宮田光雄『〈放蕩息子〉の精神史 イエスのたとえを読む』新教新書271、137～148頁から作成）。